

イタリアの歴史教育における授業論

ーラボラトリー概念の検討をととしてー

徳 永 俊 太

はじめに

本稿の目的は、ラボラトリー(laboratorio)という概念の検討をととして、イタリアの歴史教育における授業論¹を明らかにすることである。ラボラトリーというイタリア語は、アナール学派の歴史学者リシュアン・フェーヴル(Lucien Febvre)が用いた「歴史研究所」の翻訳語に用いられた言葉である。イタリアの歴史教育研究では、フェーヴルの言葉に新たな意味が付与され、歴史学者と同じような探究活動を行う授業形態をさす概念として広義には捉えられている。

これまで筆者は、イタリアにおける歴史教育理論の変遷を検討してきた²。その中で、ラボラトリーという概念が初めて提起されたのは、ラッファエッラ・ランベルティ(Raffaella Lamberti)が1978年に発表した論文の中であったことを明らかにした。ランベルティは歴史学や社会学の知見に着目して、知識の伝達を行う歴史教育が社会階層の再生産を生み出していると批判した。その再生産を乗り越えるべく、教師と生徒による歴史学者と同じような探究活動とその探究活動を行う場所の重要性を主張した。そして、活動とその活動を行う場所の二つの意味を込めた概念としてラボラトリーを提唱したのである。

ランベルティの提起以降、さまざまな研究者や教師が様々な意味を込めてラボラトリーという概念を使用し、ラボラトリーは歴史教育研究における重要な概念となった。このことは、イタリアの先行研究においても言及されている。例えばトビア・コルナッキオーリ(Tobia Cornacchioli)は、1970年代後半以降の歴史教育研究において、初等教育から後期中等教育までの一貫したカリキュラムを構想する「垂直カリキュラム」(curricolo verticale)研究とともに、ラボラトリー研究が本質的なテーマの一つであったと述べている³。すなわち、イタリアの歴史教育における授業論は、ラボラトリーという言葉的前提とし、各研究者がそれぞれのラボラトリー概念を理論化することで発展してきたのである。しかし、イタリアにおいても各論者のラボラトリー概念を比較し、その理論的変遷を明らかにするような先行研究は管見の限り見当たらない。

そこで本稿では、ランベルティがラボラトリー概念を提唱して以降、それがイタリアにおいてどのように理論化されてきたかを検討する。第一章では、ランベルティの提起と彼女の提起を大きく取り上げた民間の歴史学研究団体Insmli⁴ (Istituto Nazionale per la Storia del Movimento di Liberazione in Italia: イタリア解放運動史研究所)に着目し、ラボラトリー概念がどのような社会的背景を基盤に成立し、どのように歴史教育研究に位置づけられたのかを明らかにする。第二章では、ラボラトリー概念の理解に対立点が生まれ始めた1990年代の二人の研究者に着目し、彼らの理論の背後にある歴史教育像の違いを明らかにする。第三章では、

2006年にイタリアの多くの研究者が参加して執筆された著書『歴史を教えること』(*Insegnare Storia*)⁵を検討し、ラボラトリー研究の現在を明らかにする。

第一章 ラボラトリー概念の成立と普及

第一節 ランベルティの提起

ラボラトリー概念を初めて打ち出したランベルティの論文「歴史のラボラトリーのために」(*Per laboratorio di storia*)⁶は、1978年にInsmliが発行する歴史学雑誌『現代イタリア』(*Italia contemporanea*)で組まれた特集「高校における歴史の教授方法について」(*Sulla didattica della storia nella scuola secondaria*)に掲載されたものである。特集は、『現代イタリア』の前号に掲載されて反響を呼んだイーボ・マットッチィ(Ivo Mattozzi)の論文「探究としての歴史のための教科書批判—高校における歴史教育—」(*Contro il manuale, per la storia come ricerca - L'insegnamento della storia nella scuola secondaria-*)⁷を受けて組まれたものであった。

マットッチィの論文は、当時イタリアで取り上げられ始めていたアナール学派の歴史学に学んだものである。マットッチィは、それまでの歴史学とその歴史学に依拠していた歴史教育がイタリアという国家を前提としていることをイデオロギー的だと批判した。そして国家という枠組みを乗り越えるべく、教科書を使って歴史的な事象を覚える歴史教育を子どもが史料を使って地域の現代史を探究する歴史教育へと転換することを主張したのである。

ランベルティは、子どもが何を身につけるのかを明確にするべきであるという批判以外は、歴史教育を改革しようとするマットッチィの方向性に同意を示している。特に、子どもの経験と乖離しないという理由から、探究の対象を地域の現代史に設定しているところに、両者の共通点を見出すことができる。

そもそも、『現代イタリア』の発行元であるInsmliは、第二次世界大戦中のドイツに対するレジスタンス運動に関する史料を収集し、研究していた民間団体である。その史料収集と研究は、各都市で行われていた支部を中心にして行われていた。そして史料によって明らかにされた地域におけるレジスタンス運動の歴史を子どもたちに伝えることを団体の課題として位置づけていたのである。歴史教育において国家という枠組みを問い直し、地域の現代史を教えるというマットッチィとランベルティの構想は、こうしたInsmliの研究動向から一定の影響を受けていたと考えられる。

ランベルティはマットッチィの考えをさらに進めて、探究活動とともに探究活動のための場所の必要性を主張した。それがラボラトリーである。彼女はラボラトリーが持つ二面性を次のように述べている。「ラボラトリーとは、『活動(giuoco)の規則』とその(規則の)改訂可能性について操作的に学習できる場所(luogo)と形態(modò)である」。また『『物理的』かつ理論的に整備され、教師と生徒に操作的な能力を日常的に行使できるような場所(luogo)と形態(modò)]⁸とも表現している。ここでいう「形態」とは、教師と子どもが歴史的な探究を進めていく授業形態のことだと考えられる。

一方で、ランベルティは「形態」としてだけでなく、物理的な「場所」としてのラボラトリーオにこだわった。ここでいう「場所」としてのラボラトリーオは、理科教育における理科室や音楽教育における音楽室に相当するような、普通の教室とは異なった歴史教育のための教室である。

この考え方が示すように、彼女は歴史教育の授業方法を変えるだけではなく、学校そのものも変えていこうとする考え方を持っているのである。

この発想は、歴史教育が学校で行われることがどのような意味を持つのかという社会学的な考察から導き出されている。すなわちランベルティは、学校は知識の伝達によって社会階級を再生産しているものと捉えている。そして歴史教育の持つイデオロギー性を特に問題視している。子どもと教師が自ら歴史を探究することは、知識の伝達から抜け出し、学校を歴史の生産の場に転換することを意味している。そのために、教師が子どもに対して講義をする歴史教育ではなく、子どもたちが自ら問題を設定し、地域の歴史を探究するという歴史教育が構想されたのである⁹。以上のような彼女の主張を踏まえると、「場所」としてのラボラトórioは、知識を伝達する学校を内部から変革するという象徴的な役割を担わされていたと捉えられる。

ところでランベルティの論文が執筆された当時のイタリア社会は、石油危機などに伴う経済不安とそれに伴う労働者運動やテロリズムの横行などによって、不安定な状態を迎えていた。1976年の選挙では、イタリア共産党の議席数が第一党のキリスト教民主党に肉薄するなど、既存の社会を変革することが求められた時期でもあった。また学校のカリキュラム編成に一定の自由裁量権を与えた1977年の第517号法のように、教師と学校に自立的な教育活動を求める流れも生まれ始めていた。ランベルティが「場所」としてのラボラトórioを設置し、「形態」としてのラボラトórioを行うことで学校を変革するという志向性をもったのには、このような新しい社会像を求める時代背景があったと考えられる。

第二節 ラボラトório概念の普及

ランベルティの提起以降、ラボラトório概念は歴史教育研究にどのように位置づけられたのだろうか。ラボラトórioという概念を積極的に用いたのは、ランベルティの論文を掲載した『現代イタリア』の発行元であるInsmliである。

Insmliがラボラトório概念を用い始めたのは、1985年ごろである。この時期は教育制度における歴史教育の役割にも変化が訪れた時期である。すなわち、公教育の教育目的と教育内容、教育目標を定めた学習プログラム(programmi)に大きな変化が起こったからである。前期中等教育の1979年学習プログラムと初等教育の1985年学習プログラムは、歴史的な事象を覚えることに加えて、歴史学者と同じような能力を身につけることを求めた。

Insmliの研究も、マットッヂィやランベルティのように現状の歴史教育を否定するものから、学習プログラムを意識したものへと変化していく。Insmliが定期的に行っている全国研究集会では、1985年学習プログラムの公布以降、Insmliの研究と学習プログラムとの関係をどのように考えるのかということが研究テーマとして挙げられるようになる。また後期中等教育における歴史教育を対象としていたラボラトório研究が、初等教育と前期中等教育の歴史教育を対象とし始めたのもこの時期である。それにあわせて、初等教育から後期中等教育まで一貫したカリキュラムを組むためのカリキュラム研究が行われるようになった。このカリキュラム研究、すなわち「垂直カリキュラム」研究は、ラボラトório研究から生まれてきたのである。

『現代イタリア』の載せられた論文に着目すると、1985年に「『歴史のラボラトório』レジスタンス団体の教授に関する提案」(*"Laboratorio di storia" La proposta didattica degli*

istituti della Resistenza)¹⁰と題された論文が掲載されている。この論文は1985年1月にヴェネチアで開催されたInsmliの全国研究集会の報告を載せたものであり、団体の研究を方向付ける言葉として、ラボラトリーという言葉が使用されていることがわかる。ただし、この論文ではラボラトリーが「物質的に整備された場所(luogo)であり、それと同時に自覚的な精神的かつ専門的能力(attitudine)」と定義されている。ランベルティの定義に含まれていた形態(modus)が能力(attitudine)に置き換えられ、ラボラトリーは身につけるべき能力と捉えられており、ランベルティのラボラトリー理論とは異なった側面を見せ始めている。

Insmliの歴史教育研究に参加していた研究者に着目すると、ミラノの歴史教師マウリーチオ・グッソ(Maurizio Gusso)が歴史教育研究の主要な文献を紹介した論文「歴史の教授方法：探究とラボラトリー。イタリアにおける論争(1967—1985年)。注釈付きの書誌」(*Didattica della storia: ricerca e laboratorio. Il dibattito italiano (1967-1985). Bibliografia ragionata*)¹¹を1986年に著している。そこには「歴史の教授方法のためのラボラトリーという視角」という項目が設定されており、ランベルティの論文「歴史のラボラトリーのために」が「歴史教授のためのラボラトリーという初めての提起」として位置づけられている。さらに、Insmliは歴史教育のみを扱う団体内研究組織としてLandis¹²(Il Laboratorio Nazionale per la Didattica della Storia: 歴史教授のための全国研究所)を設立した。この団体名には、laboratorio(研究所)という言葉が用いられている。Landisはラボラトリー研究やカリキュラム研究を進める一方で、レジスタンス運動の教育というInsmliの課題を受け継ぎ、平和教育などに力を入れている。

この時期におけるInsmliの研究の方向性については、アントニオ・ブルーサ(Antonio Brusa)が1998年に発表した論文「告発された教授方法」(*La didattica sotto accusa*)¹³において言及している。ブルーサによれば、Insmliに代表されるような左翼系の研究グループは1980年代に入るまで「根本的問題、教育のイデオロギー次元、権利、歴史学の革新」といったことに注意を払っていた。しかし1980年代に入ると、「日常的な教授方法」をも研究の対象にするようになったのである¹⁴。このようにして、ラボラトリー概念に衆目が集まる状況が生まれた。

しかしこのことと並行して、ランベルティが持っていた学校改革という視点は薄れ、ラボラトリー研究は日々の授業に焦点を移している。不安定だったイタリア社会も経済状況の改善などによって、この時期は落ち着きを取り戻しつつあったことも、その原因と考えられる。

そして、日常の授業を対象としたラボラトリー研究が広がる中で、InsmliとLandisの研究に参加した研究者間に、ラボラトリー概念の定義の相違が顕在化してくることになる。それは、教育実践によってラボラトリー研究が問い直されたために顕在化した相違である。

第二章 ラボラトリー概念の分岐

第一節 デルモナコの定義

ラボラトリー概念の定義の相違は、1990年代に顕在化してきた。特に、Landisの研究の中心を担った研究者とLandisの研究に参加しつつも独自の活動を進めていた研究者の間に定義の相違が見られる。

Landisの研究の中心を担った研究者としては、Landisの研究に初期から参加し、現在Landisの議長を務めているアウロラ・デルモナコ(Aurora Delmonaco)を挙げることができる。彼女が

1994年に発表した論文「記憶はどこで形成されるのか。歴史のラボラトリー」(*Dove si costruisce la memoria. Il laboratorio di storia*)¹⁵は、デルモナコがLandisのメンバーであることが明記された論文であり、この時点におけるLandisの研究を代表する論文である。

この論文において、デルモナコは「(ラボラトリーは) 第一に物理的な場所である」¹⁶と述べて、「場所」としてのラボラトリーの必要性を強調している。

ではデルモナコの考える「場所」としてのラボラトリーはどのようなものなのか。その「構造」(*struttura*)を述べるにあたり、物理的な「場所」としてのラボラトリーが有する最低の条件は次の二つに絞られている。一つ目は子どもが自由に動き回れる広さがあること、二つ目は史料や研究成果を掲示していけるような広い壁があることである。つまりデルモナコが考える「場所」としてのラボラトリーは、史料や機器といった具体的な設備を構成要素とするのではなく、「動けることこそが本質的な教授要素である」¹⁷という言葉が示すとおり、机に座って先生の話聞く授業形態を変革するものであると言える。

ただし、設備を不必要としているわけではなく、フィルムや映画といった機材(*materiale*)を使うことの利点も述べられている。また様々な機材を使うことで、歴史に対する多様なアプローチが可能になるともしている。つまりラボラトリーに良い設備が整うことは良い実践につながるものの、必須条件ではないとされたのである。

この論文では、学校の中に設置するラボラトリーだけではなく、学校外に設置するラボラトリーという構想も示されている。デルモナコの考える「場所」としてのラボラトリーは、物理的にそれまでの学校や教室と対置されるものとして位置づけられている。学校外に設置するラボラトリーという構想はランベルティと大きく異なるものであり、学校を内側から変革するという視点は薄らいでいる。

ではデルモナコは「場所」としてのラボラトリー以外の要素をどのように捉えているのだろうか。デルモナコが示している構想を単元の流れにそって考察したい。ここで重要なのが、デルモナコがラボラトリーを学習プログラムに沿った歴史学習に付け加えられる学習として構想していることである。また学校の教師が実践を行う必要はなく、他の学校の教師や地域の研究者が実践を行ってもよいとされる。論文では、デルモナコが学校とは別の場所に設置されたラボラトリーに、子どもを集めて実践を行っていることが紹介されている¹⁸。「場所」としてのラボラトリーが教室の外に設置されるように、ラボラトリーも教室で行われる歴史学習とは別のものとして構想されているのである。

まず単元の導入では、子どもを動機づけるようなテーマと発問が重要視されている。例として、イタリア共和国憲法を扱う単元における「私たちはみんな権利をもっていると信じているけれども、それはどんなものだろう」¹⁹という発問などが示されている。

単元における子どもの学習は史料を読み取ることとして構成されている。ただし、子どもに史料を与えるだけでは混乱を招くとし、教師から枠組みを与えることで子どもが史料に取り組むという構想を示している²⁰。最も簡単な枠組みとして示されているのは、「環境」、「経済活動」、「社会的関係」、「権力」、「政治体制」、「文化」という枠組みである。これが高度になると、因果関係や、「主観」と「事象」、地域史との関係などが加えられる。

一つの事象に対して様々な枠組みで見直すことは、多様な視点を持つことにつながるといえる。

多様な視点を持つことはその他の手だてとしても現れている。例えば、子どもが個人での学習に終始するのではなくグループでの学習を行う、一つのテーマに対して異学年交流を行う、といった手だてが示されている。

単元の最後には、学習したことをまとめることが求められる。これは教師による学習の評価を主たる目的としているのではなく、「場所」としてのラボラトリーに研究成果を蓄積していくという側面からの主張である。多くの子どもが多様なアプローチによって研究を蓄積していく「場所」としてのラボラトリーは、フェーヴルが描いた様々な研究者が集って歴史を探究する「歴史研究所」を体現しているといえるだろう。

以上のことから、デルモナコの考えるラボラトリーは、問題を設定し、史料を読み、その成果をまとめるという歴史学者の探究活動を模したものであると考えられる。ただし、テーマの選択や問題の設定、探究活動を行うための史料の選択は教師によって行われている。このことから、デルモナコの考えるラボラトリーは歴史学者の探究活動を子どもに追体験させるものであるといえる。そしてそれを行う物理的な「場所」が必要とされている。

彼女の構想はInsmliの歴史研究と学校における歴史教育の連環を考え、それをつなぐ学習及び場所としてラボラトリーを構想していると捉えられる。

第二節 ブルーサの定義

Landisの研究とは異なった立場を示す研究者としては、前述したアントニオ・ブルーサを挙げることができる。ブルーサはLandisの研究に参加し、そのカリキュラム研究に影響を与えている一方で、ラボラトリー研究に関してはInsmliやLandisとは異なったスタンスで研究を進めている。特にルチアーナ・ブレジル(Luciana Bresil)に代表されるCIDI²¹ (Il Centro di Iniziativa Democratica degli Insegnanti: 教員民主企画センター)バリー支部の教師達との共同研究が有名である。CIDIは教育研究者や教員を中心とした民間団体であり、機関誌として教育雑誌『教えること』(*Insegnare*)を発行している。教育研究を中心テーマにすえていることもあり、歴史教育研究もInsmliとはやや異なっている。

ブルーサは教室の外ではなく、教室の中でラボラトリーを実現させることを目指しており、そのための教材・教具として教科書を重要視している。また自ら教科書の編集に携わり、1990年代の後半から継続的に前期中等教育用の教科書を出版している²²。

ではブルーサはラボラトリーをどのように捉えているのだろうか。ブルーサはラボラトリーを物理的な場所としては捉えず、学習の形態としてラボラトリーをいくつかの種類に分けている。

1996年に出版された前期中等教育用の副読本『ラボラトリー』(*Laboratorio*)²³シリーズでは、ブルーサはラボラトリーを四つに分類している。すなわち「概念と能力のラボラトリー」(il laboratorio dei concetti e delle abilità)、「史料のラボラトリー」(il laboratorio dei documenti)、「空間と時間のラボラトリー」(il laboratorio dello spazio e del tempo)、「シミュレーションのラボラトリー」(il laboratorio delle simulazioni)の四つである。それぞれのラボラトリーでの学習は異なっており、子どもが身につけるべきものも異なっている。例えば「概念と能力のラボラトリー」では歴史学者が書いた文章を読むことで、歴史的な事象を理解

することと、文章を読み込む能力を身につけることが求められている。また各ラボラトリーにも段階がある。例えば史料を扱って課題をこなす「史料のラボラトリー」は、歴史学者の活動を分類化した「選択する」、「質問する」、「解釈する」、「記述する」という四段階が設定されており、各段階で何を行うのが明確になっている。

ラボラトリーに関するブルーサらの考え方が端的に示されているのが、ブルーサらが作成した教科書の教師用指引に載せられたプレジルの論文「ラボラトリーを構成する」(*Costruire un laboratorio*)²⁴である。それによれば「ラボラトリーの教授方法は史料に関する探究と史料を使った探究を意味するのではない。教科書と利用できるその他の教具について様々な様式で作業することである」²⁵とされている。プレジルは探究することだけをラボラトリーと見なすのではなく、歴史教育における多様な学習の総体として捉えているのである。

つまりブルーサにとって、ラボラトリーは歴史教育・学習とほぼ同義であり、この点が非日常的なものとしてラボラトリーを位置づけたデルモナコと異なる点である。この相違点が、「場所」としてのラボラトリーに対する捉え方の違いとしても現れている。デルモナコが非学校的・非教室的なものとして「場所」を捉えているのに対して、ブルーサは物理的な「場所」としてのラボラトリーを設置せず、教室において、それまでの歴史教育をラボラトリーに組み替えることを重視している。そのために、ブルーサは実践の主体をあくまでも教師に求め、それを支援する教材・教具として教科書を位置づけている。

ブルーサが地域史ではなく、人類史をラボラトリーの対象としていることも、「場所」としてのラボラトリーを必要としない理由の一つとして考えられる。ラボラトリーを介して地域と教室における歴史教育をつなごうとするデルモナコに対して、ブルーサは人類社会全体の歴史と教室における歴史教育をつなごうとしているのである。

第三章 ラボラトリー研究の総括

第一節 ランベルティ論文の問い直し

1978年に始まったラボラトリー研究は多様な広がりを見せてきた。それらの研究の総括として位置づけられるのが、2006年に出版された著書『歴史を教えること』である。この著書は、マットゥッチィやデルモナコ、ブルーサなど、Landisの研究に参加した研究者たちが執筆している。

序文では、アナール学派の歴史学者フェーヴルの「歴史は今日のすべての学問と同様に、急速に変化している。躊躇し、失敗を繰り返しながら共同研究を試みる人びとがいる。『歴史研究所』が実在物として話題になり、しかもそれが皮肉な薄笑いを招かぬ日がやがて訪れるだろう。日に日に精巧になる道具を抜きにして一従って訓練が行き届きかつよりよい班長に率いられた作業班の組織や円滑な強調のもとに行なわれる調査などを抜きにして経済学者の作業を考えることはもはや不可能なのだ。この身近な例にならい、仕事に対する新しい概念に目覚め始めた歴史家がいる。」²⁶という文章が掲載され、ラボラトリー研究にアナール学派の影響があったことが述べられている。またラボラトリーという言葉はLandisにとって「商標」(*marchio di fabbrica*)であり、ラボラトリー概念の浸透には、Landisが多きな役割を果たしたことが強調されている²⁷。

本文は、「概略」、「教材・教具」、「方法と実施」の三部からなる。ラボラトリーとカリキュラム、ラボラトリーと教科書、ラボラトリーとwebとの連携など多岐にわたり、ラボラトリー

リオ研究の多様な広がりを見ることができる。

この著書において、「場所」としてのラボラトリーを重視していたデルモナコは、論文「ラボラトリーにおいて教える歴史：教授学的選択の根拠」(*La storia insegnata in laboratorio: le ragioni di una scelta didattica*)²⁸を掲載し、ラボラトリー研究に関する大枠について総括を行っている。この総括は、1994年の時点で彼女が提起していたラボラトリー概念とはやや趣を変えるものとなっている。

まずデルモナコはラボラトリーという用語が多様に解釈されてきたとし、ランベルティが提起したものが何であったのかについて言及している。デルモナコによれば、ランベルティの考え方は「過去を読み取る能力と現在に対してより注意深くより一貫した自覚にいたる能力を教師と生徒に身に付けさせるために、歴史教育を歴史学的考察の光をあてて見直すことへの要求に由来する」ものであるとする。このランベルティ論文の解釈を踏まえた上で、自らの持論として、「方法(metodo)としての理解されるラボラトリーと特別な部屋(aula specifica)として理解されるラボラトリー」との区別は副次的な要素であり、操作を通して歴史の学習を行うことこそが重要であるとする。その際には、「生徒たちを受動的な受取人ではなく、歴史的過程の製作者として考える」ことの重要性を述べている²⁹。

正確には、ランベルティが「形態」という言葉を使っていたのに対して、デルモナコは「方法」という言葉を使用してラボラトリー概念を再定義している。すでに1994年の時点で、デルモナコは「方法」という言葉を使わなかったものの、教師による具体的な教授方法に踏み込んで論を進めていた。「方法」としての再定義は、「形態」をどのように実現するのかが研究の視角が意識化されたものだといえる。

そしてデルモナコの主張の大きな変化といえるのが、「方法」としてのラボラトリーと「場所」としてのラボラトリーの区別を副次的なものとしている点である。その上で、デルモナコはラボラトリーそのものを検討の対象にするのではなく、歴史教育を授業論(didattica)、教育学(pedagogia)、歴史学(storiografia)の三点から考察し、ラボラトリーを歴史教育の中に位置づけなおすことを主張している。

授業論の視点からは、主に子どもの動機の問題が取り上げられている。知識の伝達という受動的な学習は歴史嫌いの子どもを生み出してしまう。また現在イタリアにおいて増えている移民の子どもたちにこれまでの歴史教育が対応できるのかという問題も提起されている。教育学の視点からは、子どもの認知的な能力の発達と時系列での学習が矛盾することが指摘されている。歴史学の視点からは、学校で学習する歴史的知識をどのように設定できるのかという問題が取り上げられている。

デルモナコの総括は、ランベルティ論文の意義をラボラトリーの提唱ではなく、歴史教育観の転換として読み直すものである。そしてランベルティが提起した歴史教育観を現代的な視点から問い直すことを志向している。

デルモナコがラボラトリー概念規定を直接の対象とするのではなく、ランベルティの歴史教育観を問題とした背景には、2001年に政権を奪取した中道右派政権が2004年に公布した「学習に関する具体的な目標」(Obiettivi Specifici di Apprendimento)が関係すると思われる。Landisなどの左翼系の研究グループは、神話についても言及した「学習に関する具体的な目標」

によってイデオロギー的な歴史教育が復活すると批判している。デルモナコには、ラボラトリー研究が前提としてきたパラダイムが転換しないように、そのパラダイムを理論的にもう一度問い直すという問題意識があったのだと考えられる。

第二節 ラボラトリーオの位置づけ直し

『歴史を教えること』では、デルモナコに加えて、マッソッチが論文「ラボラトリーオの思考」(*La mente laboratoriale*)³⁰によってラボラトリーオ概念そのものについての理論的な考察を行っている。1978年に、それまでの歴史教育を批判する論文を発表したマッソッチは、それ以降歴史学と歴史教育との関係を考察の軸としながら、おもにカリキュラム研究の分野で活躍した。この論文でも、歴史学と歴史教育との関係が重要な意味を持っている。

論文「ラボラトリーオの思考」の冒頭では、「作業の方法とラボラトリーオの教授方法がなければ、整備された場所としてのラボラトリーオとはいえない。しかし、ラボラトリーオの思考がなければ効果的な方法とラボラトリーオの教授方法はいない」³¹というテーゼが示されている。デルモナコと同じく、マッソッチも「方法」と「場所」という枠組みでラボラトリーオを論じている。

表1 「活動すること」と「ラボラトリーオ教授方法」

活動すること(operatività)	ラボラトリーオ教授方法(didattica laboratoriale)
- 過程によって配置され、様々な環境で行われる（教室、博物館、地域、家など） - 生徒の自主性によって展開される - 個々の生徒によって展開される - 教授的な介入はある場面で行われ、その後生徒は次の場面で実行すべき操作を受け渡される。	「ラボラトリーオ教授方法」もしくは「ラボラトリーオ」がその価値を持つためには、以下のことが求められる。 - 教師、生徒、生徒同士の強い相互活動を実現する； - 学習は協同的かつ共有的なものである； - 活動は単一の環境で行われる； - 教授的介入は生徒の活動と組み合わせられる； - 構造化され、限定された目標が達成する際に機能する生徒の活動を引き起こすために、適切な教授学的機材が存在する。 - 環境は —特別な設備を必要としないラボラトリーオ的活動のためならば、単なるの教室である。 —活動が設備や特定の機材（例、オーディオ機器など）を求めるならば、設備が整った空間である。 —例えば農場と居住形態の関係を観察・読解するコンピテンスを行使しようとするならば、地域（例、景観）である。

(*La mente laboratoriale*, p.11の表をもとに筆者が作成)

テーゼの前半部分にある方法と場所の関係は、ラボラトリーオの間違った解釈に対する警鐘である。それは、よい結果のためには設備の整った部屋があればよいとする解釈、あるいは活動をさせさえすればよいとする解釈である。これらの解釈を正すために、マッソッチは「活動すること」(operatività)と「ラボラトリーオ教授方法」(didattica laboratoriale)との区別を表1のよ

うに整理している。

両者の大きな違いは、「活動すること」が個々の子どもによってなされるのに対して、「ラボラトリー教授方法」は「教師、生徒、生徒同士の強い相互活動」を重視している点にあるといえる。教授と学習の関係についても、「活動すること」が一方であるのに対して、「ラボラトリー教授方法」は教師と子どもの双方向である。マッソッチィは、子ども個人を重視するのではなく、また教師から子どもへの一方のみを重視するでもない「ラボラトリー教授方法」を、「知識の形成過程の一部」³²として捉えている。

そしてその「知識の形成過程」に必要なのが、「ラボラトリー思考」であり、それは「教科書の思考」との対比を用いて論じられている。「ラボラトリー思考」の骨子は、知識観の転換とそれに伴う歴史教育観の転換である。マッソッチィは、フランスの哲学者ブルーノ・ラトゥール(Bruno Latour)の知見を援用し、「歴史的な知識は知ること(sapere)と行為すること(saper fare)の交錯において生まれる」と主張している³³。この知識観に基づけば、歴史教育は「知ること」に加えて、「行為すること」が必要となる。すなわち子ども自身による歴史的な探究が歴史教育に必要となるのである。

マッソッチィによる総括は、「場所」としてのラボラトリーと「方法」としてのラボラトリーとを同じレベルで論じるのではなく、「場所」の前提として「方法」を、「方法」の前提として「ラボラトリー思考」を論じている点に特徴がある。それはラボラトリーが「場所」と「方法」というレベルのみで語られてきたことへの警鐘を鳴らすものであり、「方法」としてのラボラトリーをメタ的に考察できる歴史教育理論の必要性を説くものであるといえる。

ラボラトリーを基点にして歴史教育そのものを問い直すこの視点は、デルモナコの総括に通ずるものがある。マッソッチィも「学習に関する具体的な目標」において示された歴史教育が復古的であるという批判を行っており³⁴、デルモナコと共通する問題意識を持っていると思われる。

おわりに

本稿では、ラボラトリーという概念の検討をとおして、イタリアの歴史教育における授業論を明らかにすることを試みた。まずランベルティによるラボラトリー概念の提起とInsmliの研究を取り上げ、ランベルティが持っていた学校改革という視点が社会の安定や教育制度の改革によって薄らいでいったことを明らかにした。次にデルモナコとブルーサのラボラトリー概念を比較し、両者の対立が従来の授業内容に新たな授業内容を加えるという歴史教育像と従来の授業内容を組み立て直すという歴史教育像の対立であることを明らかにした。そして『歴史を教えること』からラボラトリー概念を問い直した二つの論文を検討し、ラボラトリー自体を問い直す理論が必要とされていることを明らかにした。

ここからイタリアの歴史教育における授業論は今、ラボラトリーという概念を用いて研究を進めるだけではなく、これまでの研究蓄積を生かすためには何が前提として必要なのかを探る段階へと移行しているといえる。それは、EUの統合、移民の増加、グローバル化の進行といった1970年代から大きく変化したイタリア社会を念頭において、ランベルティの研究のように、歴史教育の授業論を再び社会的な文脈で捉えなおすことをも意味している。

ラボラトリーの前提を探ることは、歴史教育におけるその他の要素とラボラトリーとの関

連を探ることを要求する。特に歴史教育が活動だけに陥らないよう、教育内容や教育目標との関連においてラボラトリーを捉えることは重要である。今後の課題としたい。

- ¹ 本発表で用いる授業論という言葉は、イタリア語でdidatticaという言葉を目指す。didatticaは狭義には教授方法を、広義には授業に関わる様々な理論と方法を目指す。
- ² 拙稿「戦後イタリアにおける歴史教育理論の変遷 ―歴史学と歴史教育の関係に着目して―」『教育方法学研究』第33巻、2007年。
- ³ Tobia Conracchioli, *Lineamenti di didattica della storia. Dal sapere storico alla storia insegnata: la mediazione scolastica*, Pellegrini, Cosenza 2002, p.234.
- ⁴ <http://www.italia-liberazione.it> (2008年9月5日確認)
- ⁵ a cura di Paolo Bernardi, *Insegnare Storia. Guida alla didattica del laboratorio storico*, UTET Università, Milano 2006.
- ⁶ Raffaella Lamberti, *Per un laboratorio di storia, <<Italia contemporanea>>*, 1978, n.132.
- ⁷ Ivo Mattozzi, *Contro il manuale, per la storia come ricerca. -L'insegnamento della storia nella scuola secondaria-*, <<Italia contemporanea>>, 1978, n.131.
- ⁸ R. Lamberti, *op.cit.*, p.82.
- ⁹ 拙稿、前掲論文、p.4。
- ¹⁰ Laura Capobianco, Guido D'Agosto, *"Laboratorio di storia" La proposta didattica degli istituti della Resistenza*, <<Italia contemporanea>>, 1985, n.158.
- ¹¹ Maurizio Gusso, *Didattica della storia: ricerca e laboratorio. Il dibattito italiano (1967-1985). Bibliografia ragionata*, in *La storia insegnata. Problemi, proposta, esperienza*, Bruno Mondadori, Milano 1986.
- ¹² <http://www.landis-online.it> (2008年9月5日確認)
- ¹³ Antonio Brusa, *La didattica sotto accusa, <<I viaggi di Erodoto>>*, 1998, n.35.
- ¹⁴ *Ibid.*, p.43.
- ¹⁵ Aurora Delmonaco, *Dove si costruisce la memoria. Il laboratorio di storia*, in Ministero della Pubblica istruzione, *Dalla memoria al progetto. Insegnare storia oggi*, 1994.
- ¹⁶ *Ibid.*, p.43.
- ¹⁷ *Ibid.*, p.44.
- ¹⁸ *Ibid.*, p.51.
- ¹⁹ *Ibid.*, p.50.
- ²⁰ *Ibid.*, p.53.
- ²¹ <http://www.cidi.it> (2008年9月5日確認)
- ²² ブルーサの教科書研究に関しては、拙稿「アントニオ・ブルーサの歴史教科書研究に関する一考察」『京都大学大学院教育学研究科紀要』第54号、2007年を参照。
- ²³ Antonio Brusa, Luciana Bresil, *Laboratorio 1, 2, 3*, Bruno Modadori, Milano 1994-1996.
- ²⁴ Luciana Bresil, *Costruire un laboratorio, in il nuovo racconto delle grandi trasformazioni. -Guida per insegnante-*, Bruno Mondadori, Milano, 2005.
- ²⁵ *Ibid.*, p.108.
- ²⁶ リシュアン＝フェーヴル、長谷川輝夫訳『歴史のための闘い』平凡社、1995年、p.177。
- ²⁷ a cura di Paolo Bernardi, *op.cit.*, p. XII.
- ²⁸ Aurora Delmonaco, *La storia insegnata in laboratorio: le ragioni di una scelta didattica* in a cura di Paolo Bernardi, *Insegnare Storia. Guida alla didattica del laboratorio storico*, UTET Università, Milano 2006.
- ²⁹ A. Delmonaco, *op.cit.*, p.21.
- ³⁰ Ivo Mattozzi, *La mente laboratoriale*, in a cura di Paolo Bernardi, *Insegnare Storia. Guida alla*

didattica del laboratorio storico, UTET Università, Milano 2006.

³¹ *Ibid.*, p.10.

³² *Ibid.*, p.12.

³³ *Ibid.*, p.13.

³⁴ Ivo Mattozzi, *Pensare nuova storia da insegnare*, in "*Indicazioni nazionali*" e "*profili educativi*" Editcomp, Bologna, 2003.

(教育方法学講座 博士後期課程2回生)

(受稿2008年9月8日、改稿2008年12月1日、受理2008年12月11日)

A Review on the Theory of History Teaching in Italy: Through a Reflection on the Concept of Laboratorio

TOKUNAGA Shunta

This review focused on a theory of history teaching in Italy by reflecting on the concept of laboratorio. In Italy, laboratorio broadly means a mode of lesson in which students perform their own research as historians do. This word originally means laboratory of history and was proposed by Lucien Febvre. In 1978, Raffaella Lamberti proposed a concept of laboratorio for the first time with a social perspective. She insisted on research by teacher and children and defined laboratorio as a mode of lesson and as a room for history education. After her proposal, many researchers and teachers proposed researches and practices with this word. However the concept of laboratorio caused a misunderstanding for history education. Some people thought that they only need methods to present lesson and a room well-equipped for good history teaching. In 2006, Italian researchers published a book in which they summarized researches of laboratorio. In this book, Ivo Mattozzi and Aurora Delmonaco insisted that teachers and researchers did not think about only method and room, but should change their view of history education.